

## 新千円札に想う

4年前の『牛津だより』では、「データ生産工場とでも言うべきアメリカの物量主義的ラボと違い、個人のアイデアを最大限に尊重するイギリス的な研究のあり方に触れることができ、やっぱりオックスフォードに行ってもよかったと今でも思っています」と書いた上で、国家プロジェクト化する日本の科学研究のあり方へ疑問を投げかけました。今でもその思いは変わらず、むしろ一段と強くなっています。

実は今、「日本の科学政策の誤りを端的に示す一例」ではないかと思う物を手に取って眺めています。それは何を隠そう、つい先頃発行された新しい千円札です。言うまでもなくこの紙幣には、二十年来親しんできた夏目漱石に替わり、野口英世の肖像が印刷されているわけですが、野口の評価が国際的に定まってすでに久しい現在、「なぜ今さら野口なのか」という疑問を抱くのは私だけでしょうか。

周知のように、野口は1876年に福島県猪苗代湖畔の貧しい農家の子として生まれ、幼少時の火傷により左手が不自由となりました。このようなハンディキャップにも関わらず努力を重ねて医師となり、さらに野望を抱いてアメリカに渡り、次々と病原微生物を「発見」して約200編もの論文を著し、ついにはパスツールやコッホに比肩される微生物学界のスーパースターとなります。

この伝説的なサクセスストーリーは確かに面白く、子供向け「偉人伝」のトップランナーであり続けていることも頷けます。しかし野口が「医学界のトップランナー」たり得たのは束の間でした。野口の死後行われた業績評価により、最大の業績のひとつと言われた「梅毒スピロヘータの純粋培養」や「黄熱病レプトスピラの発見」を含む彼の論文の大部分は誤りであり、生き残ったものはごくわずかであることが判明しています。

何が野口を狂わせ、数々の誤った結論に導いたのでしょうか。

当時アメリカは、ドイツ医学に追いつき追い越せと国を挙げて躍起になっていました。野口の師であったフレクスナーの率いるロックフェラー医学研究所も、ヨーロッパに立ち後れていたアメリカの医学を世界のナンバーワンとすることを目指して設立されました。「志を得ざれば、再び此地を踏まず」という思いでアメリカに赴いた以上、フレクスナーに認められるため、野口は次から次へと注目される論文を発表し続けなければならなかったのでしょう。

そのようなプレッシャーが、当時の顕微鏡では見えるはずのないポリオ・狂犬病・黄熱病などの病原体を野口に見せてしまったのかも知れません。不正行為はなかったでしょうが、科学者としての慎重さは欠けていたと言わざるを得ません。先に進むことしか許されず、振り返ったり踏み留まったりするゆとりを与えられなかった野口は、以来100年にわたり世界中に蔓延していく業績偏重主義の最初の犠牲者と言えるのではないのでしょうか。留学先にアメリカを選んだことが野口にとっては不運だったのかも知れません。

もし野口がアメリカではなくイギリスに渡っていたならば、どうなっていたでしょう。おそらくは全く違った人生が開け、ひょっとするとホンモノの科学者になれていたかもしれないと思うと大変残念です。

当時、明治政府は基礎研究を重視するドイツ医学こそ最先端であると考え、実証主義的なイギリス医学を軽んずる傾向がありました。基礎医学、特に微生物学の分野でドイツが抜きん出ていることは確かですが、これを偏重しすぎた嫌いがあります。臨床医学を重視するイギリス医学の重要性に日本が気付くのは、実は最近のことなのです。

ロンドンの聖トーマス病院で臨床医学を学び、日本海軍にイギリス医学を導入した高木兼寛は、脚気は栄養の偏りによることを臨床研究により証明し、その予防法・治療法を見出しました(注1)。実は、野口の恩人である会津若松の会陽医院院長渡部鼎は、会津に迎えられる以前、「脚気菌」を発見したと報告して陸軍の「脚気感染症説」の宣伝に一役買ったあげく、結局は高木の「栄養障害説」に敗退した人物です。南米エクアドルで野口が「黄熱病レプトスピラ」を見つけたとき、恩師の雪辱を意識したかもしなかったか……。

一方、金にだらしなかったこと、豪遊して一晩で財産を磨ったこと、結婚詐欺まがいを働いたことなどが、野口の人間性の表れとしてしばしば伝記に描かれています。このような人間的な弱さゆえ、かえって愛すべき人物として描かれることが多いようです。取りあえずそれらはよしとすると、野口の人間性の別の一端を示すと思われる次のエピソードはどうでしょうか。

日本ではあまり知られていませんが、ニューヨークで野口が行った臨床研究が倫理性に欠けるとして新聞などで批判を浴びたことがあります。当時ロックフェラー研究所の準メンバーだった野口は、「ルエチン」という物質が梅毒の血清診断法に使えるか400人の被験者に人体実験を行いました。しかし被験者の多くは精神病院の入院患者、施設の孤児、

公立病院の患者であり、実験について事前に説明したり承諾を取ったりはしていません(注2)。

このように問題の多い人物を、日本を代表する科学者・医学者として誰の目にも触れる紙幣に印刷することが、世界の良識ある人々にどう受け取られるか心配です。

豊臣秀吉などもそうですが、どん底から這い上がって艱難辛苦の末に栄達を遂げた人物に日本人は弱いようです。数々の残虐非道の行いが明らかとなっているにもかかわらず、なぜか秀吉は許され、今も多くの人々に愛されてしまいます。

野口の伝記を、『太閤記』のような通俗的立志伝として楽しむだけなら罪もないのですが、それによって野口をホンモノの科学者として後生に語り継ごうとするのは間違いです。野口の仕事の全てが誤りだったわけではありませんが、たとえ価値ある論文がいくつかはあるにせよ、その程度の科学者は他にもたくさんいます。野口の伝記のキャッチコピーによくある「日本が誇る世界的医学者」などというのは明らかな誇張であり、子供達に誤解を与えます。

新千円札にあえて野口を採用するのは、科学研究にかつてのような夢がなくなり、子供の理科離れが進みつつある今日、野口のようにがむしゃらで向上心旺盛な科学者を育て、科学立国を目指したいという政府の意図でしょうか。しかしそれならば、もっとホンモノの科学者を連れて来なくては意味がありません。それに、ホンモノの知識人であった「前任者」夏目漱石に対しても失礼です。

紙幣に印刷すべき人物をあえて明治の医学者から選ぶとすれば、高木兼寛なんかの方がよかったのではないかと……。まっさらな千円札を眺めながら思うのでした。

(滞英期間:1986.9~1988.9)

注1: ドイツ帰りの陸軍軍医森林太郎(鷗外)が高木の発見を学問的裏付けのない偶然の産物として攻撃したのは有名な話です。「なぜ効くのか」秩序立てて説明しないと納得しない基礎理論重視のドイツ医学に対し、理由は不明でも効くとわかった治療法ならとりあえず認めようとする実践的イギリス医学。こと脚気予防に関しては、前者にこだわった陸軍が敗れ、後者を取り入れた海軍の圧勝に終わります。

注2: インフォームドコンセント(IC)が強調されるようになったのは最近だから野口の時代にこれを求めるのは酷である、という言いわけは通じません。ICという言葉こそありませんでしたが、その概念は当時すでにあり、事前に説明して被験者の同意を得ることはむしろ当たり前でした。ところがこの後、第二次世界大戦の勃発によってICの概念はむしろ後退してしまい、数々の悲劇を生むこととなります。

オックスフォード大留学経験者のミニコミ誌『牛津だより』第9巻(2004年発行)掲載